

実践事例
2

自由進度学習「山吹セレクトタイム」を導入し、 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現

愛知県 名古屋市教育委員会、名古屋市立山吹小学校

愛知県名古屋市 プロフィール

◎教育施策を「人生（ライフキャリア）の支援」「質の高い学びの促進」「多様な主体との連携・協力」の3つの視点で実施。一人ひとりの子どもを大切にしたい教育の実現のために、学びの個別化・協同化・プロジェクト型学習へ、公教育の構造転換を進めている。

人口 約 232 万 6,400 人 面積 326.50km² 市立学校数 小学校 262 校、中学校 110 校、特別支援学校 4 校、高校 14 校 児童生徒数 約 17 万 6,100 人 教員数 約 1 万 1,400 人

名古屋市立山吹小学校 プロフィール

◎ 1872（明治5）年開校。愛知県庁や名古屋市役所にほど近い、市の中心部に位置する。研究主題を「夢中になって目を輝かせる子どもたち～『個別最適な学び』と『協働的な学び』を実現する学校づくりを通して～」として実践研究に取り組む。

校長 山内敏之先生 児童数 662 人 学級数 23 学級 教員数 34 人



名古屋市教育委員会
新しい学校づくり推進部
学びの改革推進担当
主任指導主事

横井裕人

よこい ひろと
公立小学校教諭を経て、
2017 年度から市教委。



名古屋市教育委員会
新しい学校づくり推進部
学びの改革推進担当 指導主事

岩本 歩

いわもと あゆみ
2021 年度まで山吹小学校
に勤務。



名古屋市立山吹小学校
校長

山内敏之

やまうち としゆき
同校に赴任して 9 年目。

週5～10コマ、子どもが自分で 学び進める自由進度学習を実施

愛知県名古屋市立山吹小学校では、各学年 1 人以上の教員が、個別最適な学びを研究する「授業づくり部会」、または、協働的な学びを研究する「協働学習部会」に所属し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る学校づくりを進めている。

特に、自由進度学習「山吹セレクトタイム（以下、YST）」では、「いつ、何を、どのように学ぶか」を、自分の関心や能力、進度に合わせて、子どもが自ら計画を立てて進める。クラス別に国語・算数・社会・理科・生活科で行い、学年や時期に応じて週5～10コマを設定している。

YSTは、10年以上前から小学校教員として自由進度学習を実践してきた、現・名古屋市教育委員会（以下、市教委）の岩本歩指導主事が同校に赴任した2020年度、5年生の3クラスで始めた。2021年度からは、全学年に広げ、日本イェナプラン教育協会のメンバーと一緒に「20の原則」

について語り合うなど、全教員がイェナプラン教育のコンセプトを学びながらYSTの授業づくりを行ってきたと、山内敏之校長は語る。

「低学年では、YSTを国語や算数の1単元から始め、発達段階に応じて単元や教科を増やすなど、子どもの実態に応じた形で広がっていきました」

YSTは、次のように進めていく。

①各自で時間割の作成～教員チェック

担任は、翌週の予定を記載した「週計画」（図4）と、翌週に取り組む各教科の課題量の目安を、毎週金曜日に子どもに配布。子どもは、単元ご

図4 「週計画」の子どもの記入例

	18 月	19 火	20 水	21 木	22 金
朝の時間	サークル (ライン ナップ)	サークル ペアトーク	サークル ペアトーク	サークル ペアトーク 漢字⑥まで 提出	
1時間目	ペアトーク (週計画を 立てる)	社会①	YST ③ 国語②	YST ⑦ 理科②③	遠足 東山動物園
2時間目	算数①	外国語	外国語	YST ⑧ 理科④	
3時間目	国語①	理科①	YST ④ 国語③	道徳	
4時間目	YST ① 算数②	YST ② 算数③	YST ⑤ 社会②	家庭科	
5時間目	総合学習 (見学ルート 決め)	体育	YST ⑥ 社会③	1週間の 振り返り	
6時間目		委員会	体育		

課題の提出日をメモ書きする子どももいる。

赤枠がYSTで、この例では8コマある。子どもは、「単元進度表」を確認しながら、国語・算数・社会・理科の中から、取り組む教科と学習内容を選んで、計画を立て、記入する(赤文字部分)。

外国語、音楽、図画工作、家庭、体育、道徳の授業は、一斉に行う。

算数①、国語①、社会①、理科①では、単元の最初としてインストラクションを実施。

※山吹小学校の提供資料を基に編集部で作成。

とにゴールや教材、時数などを示した「単元進捗表」(図5)も見ながら、YSTのコマで「どの教科をどのように学習するか」を考える。教員は、一人ひとりの時間割をチェックし、翌週に向けてアドバイスをします。

「子どもの特性に合った学び方を伝えたり、学力上位層の子には、『もっと探究して深められることがあると思うよ』と助言したりします」(岩本指導主事)

②単元のインストラクション(説明)

単元の最初の授業では、「インストラクション」を一斉に行い、単元のゴールイメージ、学ぶ価値と学び方を子どもと教員が共有する時間を持つことで、学びへの動機づけを図る。

「インストラクションは、学習内容と日常生活との結びつきや、既習事項とのつながりなど、教科の見方・考え方に通じる内容を共有する重要な場です。教員の読み聞かせ、動画を見ての問いづくり、成果物の提示など、単元の内容に応じて手法を工夫しています」(岩本指導主事)

③全体の流れをルーブリックで共有

インストラクションでは、教員が作成した「ルーブリック」(写真3)で、

その単元で身につけてほしい学習内容や学び方、到達目標などを、子どもと共有する。それぞれ3段階で示しており、子どもは学びの見通しを持つことで、自律して学習できる。

④学習する(YST)

YSTでは、全員で「サークル対話」(写真4)を行った後、子どもは各自の計画に沿って学ぶので、国語の教科書を音読する子、算数のデジタルドリルに取り組む子など、1クラスで複数の教科が同時に進行する。黒板の前に集まって算数を教え合うグループ(写真5)や、「Aさん、ここが分からない」と呼ばれ、自分の学習の手を止めて熱心に教える子もいる。

YSTの間、教員は子どもの声に耳を澄ませ、質問もしながら、子どもの学びがゴールからずれていたら軌道修正する。同じ箇所を理解できていない子を集めて、急ぎインストラクションを始める場合もある。

YSTを実施してから3年目となり、単元のゴール設定や進め方の工夫が蓄積されてきた。単元進捗表やルーブリック、教材のプリントなどのデータは校内で共有しており、それを各教員がアレンジして活用している。

「個別最適な学び」で 学び直しも引け目なく可能

YSTは、まさに「個別最適な学び」を実現していると、山内校長は語る。

「例えば、従来型の一斉授業の中で1人だけ九九に戻って学習し直すのは、教員にとって指導しづらく、行ったとしても本人には精神的につらい思いをさせます。一方、自分で学びを選ぶYSTでは、教員は子どもに適した問題を提案でき、子どもはできない所まで戻って学ぶことに引け目を感じなくて済みます。課題が早く終わった子どもは、発展問題に取り組んだり、他者に教えたりすることで、より理解が深まっています」

卒業文集には例年、学校行事や修学旅行の内容が大半だったが、2021年度は、約15人がYSTを通じた学びの成長を次のように書き記した。

「YSTを通して、計画通りに進めたり、計画を修正したりできるようになりました。今、何をすべきか、自分にとってどんな勉強が必要なのかを考えていきたいです」「友だちと一緒にやる意味が学べたと思います。自由には責任がついてくる。6年生の自分は、責任を持って何事も取り組めるようになっていました」

それらの文面からは、自律的な学習者に育っている様子がうかがえる。

図5 5年生算数科の「単元進捗表」(抜粋)

プロジェクト名 「小数のわり算マスターになろうPJ」①					
単元のゴール(学習内容)：小数のわり算を筆算や暗算で求めることができるようになる。 図を用いたり、小数の仕組みや計算の決まりを用いたりして、面積や体積、文章問題を解くことができる。					
単元のゴール学び方 「互いのできる・わかるをさらに尊重し合う」「説明上手」					
時間	ページ	問題	「今日のゴール」	計数	確認クイズ
1 みんな	52~53	□1	インストラクション 「小数のわり算」とは	25	わかった◎・まあまあ○ わからない△
2	54~55	□271 △3	だいち・ひなた・さくらの解き方を説明できるようにする。(整数÷小数)	26	誰の解き方が賢い?0を付けよう だいち・ひなた・さくら 0を付けた人の解き方を説明しよう (友達チェック)

教科書や資料など、該当ページと問題を示す。

子どもは、取り組みを終えたら、右端の進捗をチェックする欄で自己評価を行う。「確認クイズ」「振り返り」「完了日」など、チェック方法は教科に応じて工夫している。

※山吹小学校の提供資料を抜粋して掲載。

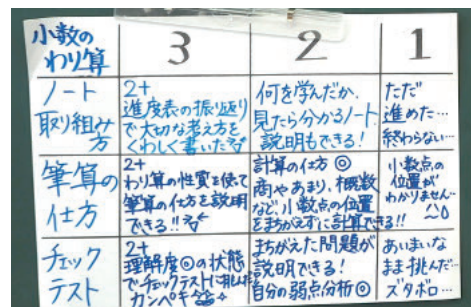


写真3 YSTでは、ルーブリックと単元進捗表を黒板に掲示。子どもや教員が学びの進め方や到達度を、常に確認できるようにしている。

※山吹小学校の提供資料をそのまま掲載。



写真4 あるクラスの「サークル対話」では、円座になって、「国語の暗唱を頑張りたい」「周りの人にとってうるさくならないように注意する」など、自分が頑張りたいことを隣同士で伝え合い、数人がそれを発表。担任が、「今、意識したことを後で振り返ってもらいます」と伝えてから学習がスタート。

写真5 YSTでは、子どもは、黒板の前や廊下など、好きな場所で学習に取り組む。担任はそれを見て回り、見取りと支援に徹する。自分で学びを進められる子には、1～2問出題して到達度を確認し、できていたらそのまま本人に任せる。一方、手が止まりがちな子にはこまめに声をかけ、状況に応じた問題を出すようにしている。



異学年グループの探究的な学びで「協働的な学び」も実現

「協働的な学び」の実現に向けては、同校は2019年度から動き出していた。自身の情報収集でイエナプラン教育を知った山内校長が、「ワールドオリエンテーション」の理念を基に1～3年生、4～6年生のグループで探究的な学びに取り組む「ふれあい活動」を提案。「総合的な学習の時間」でスタートした。2021年度は、低学年では「身の回りのもったいないを探す」、高学年では「住んでいるまちをよりよいまちに」をテーマに、異学年の8人程度のグループで活動したところ、上級生はリーダーシップを発揮し、下級生は上級生を手本としながら学び、互いの意見に耳を傾けながら活動を進める、まさに『協働的な学び』が実現していたという。

「1～3年生、4～6年生に分けたことで、年齢が近くて話しやすく、3年生と6年生の2回、リーダーシップを発揮する経験ができるのも、大きな効果です」（山内校長）

民間事業者と連携し、学びの転換を進める事業を始動

実は山吹小学校の実践は、市教委の「ナゴヤ・スクール・イノベーション事業」によるものだ。社会が劇的に変化する中で、自らの可能性を最大限に伸ばし、人生をたくましく生きていく「なごやっ子」を育成するため、「学校＝すべての子どもがよりよい成長をしていく場」を目指す事業だ。

子ども一人ひとりの興味・関心や能力、進度に応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ろうと、2019年度にスタート。

2021年度に行った、各学校が民間事業者と連携しながら学びの転換を進める「マッチングプロジェクト」には、100以上の応募があり、その中から6つのプロジェクトを選定した。新しい学校づくり推進部の横井裕人主任指導主事は、次のように説明する。

「マッチングプロジェクトでは、学校・園の課題や取り組みたい内容等に基づいてプロジェクトごとに仕様書を作成し、公募型プロポーザルにより連携先を決めました。IT企業や空間デザイン企業、教育研究機関、NPOなど、6プロジェクト合わせて20以上の事業者と連携しました」

山吹小学校を含む6プロジェクトの実践は、ウェブサイトで発信するとともに、公開授業を定期的に行って、実践校以外の教員にも実際の授業を共有。教員の意識改革にも力を入れ、新しい学びに関する講演や実践校の報告などを行う学習会を年6回程度実施している。

市教委は、2019年度、オランダ研修に8人を派遣。2021年度には、日本イエナプラン教育協会によるオンライン研修も実施し、そのアーカイブは1,000人以上の教員が視聴した。先進校視察にも費用を支援しており、様々な形で学びの転換を後押ししている。

「山吹小学校は、イエナプラン教育のコンセプトを自校に応じた形で取り入れて成果を出しています。同様に、市内各学校が6プロジェクトの取り組みを参考に自校の課題に応じて取り入れ、『個別最適な学び』と『協働的な学び』が実現できるよう支援していきます」（横井主任指導主事）

Web VIEWnext ONLINE では

名古屋市・坪田知広教育長のインタビューをウェブ記事で紹介

「ナゴヤ・スクール・イノベーション事業」を始めとした、名古屋市の様々な教育改革について、VIEW next ONLINEの「ウェブオリジナル記事」コーナーでご覧いただけます。

VIEW next ONLINE 検索

右記の2次元コードからもアクセスできます。▶▶▶

